

NPO 法人血液情報広場・つばさフォーラム in 埼玉 レポート

| | |
|------|--|
| 日時 | 2015年10月31日(土) 13:00~17:00 |
| 会場 | 越谷中央市民会館 会議室 |
| 実施内容 | ① 全体会(1) 血液、血液がん、最新の治療について基本的な知識をもと ・血液と血液がんの理解 ・血液がんの治療植科 ② 疾患別Q&A分科会 ③ 全体会(2) ・がんリハビリの効果的な受け方 ・通血液がんの化学療法について ・共に考えるより良い治療とより良い治癒 |

去る2015年10月31日(土)、埼玉県越谷市の越谷中央市民会館で「NPO 法人血液情報広場・つばさフォーラム in 埼玉」が開催されました。秋も深まり、日中も肌寒い陽気でしたが、最終的に181名もの皆様にご参加いただくことができました。当日のメモをもとに、概要をレポートさせていただきます。

① 全体会(1) 「血液、血液がん、最新の治療について基本的な知識をもと」

まず初めに、群馬大学大学院保健学研究科の村上博和先生に「血液と血液がんの理解」についてご講演していただきました。村上先生からは、私たちの血液の仕組みについて、その組成やそれぞれの性質。また、造血細胞の分化に伴う各血液がんの種類についてといった、血液がんを知るうえでの基礎を教えてくださいました。

続いて、それぞれの「血液がんの治療」について、国立がん研究センター中央病院造血幹細胞移植科の山下卓也先生がご講演して下さいました。それぞれの疾患において、現在最も効果的な治療法が取り入れられています。CMLの場合には、分子標的治療薬が主流となっていますが、他の疾患では主に薬物療法が行われ、骨髄移植が選択される場合もあります。分子標的治療薬は、従来の抗がん剤と異なり特定のがんにしか効かない分、副作用が少ないと考えられていますが、実際には予想外の副作用も報告されてきています。つばさフォーラムでは、それぞれの血液がんの治療を知ることができるため、自分自身の現在の治療を客観的に見ることはできないのでしょうか。

② 疾患別Q&A分科会

骨髄増殖性腫瘍（慢性骨髄性白血病・骨髄繊維症・本態性血小板血症・真正多血症等）

骨髄増殖性腫瘍という括りで、蓮田病院内科の西田淳二先生にご講義していただきました。なお、分科会会場には、合わせて38名の患者さんやご家族がお集まり下さいました。

2002年に承認されたグリベックの登場により、CMLの患者さんの生存率は劇的に改善し、5年生存率も93%を達成しました。現在では、CMLと診断されても、薬を飲めばまず命に関わることはありません。さらにグリベックに加え、より効果の高い第2世代のタシグナ・スプリセルも最初の治療薬の選択肢となり、新たにボスチニブも治療の選択肢に加わっています。また、難治性CMLに多いT315Iの変異にも対応するポナチニブも開発され、治験が進み欧米では既に認可され日本においても早くて来年末までには認可されるかもしれないとのことです。

それぞれの薬で副作用は異なるものの、特にグリベックでは、主に抑制するDNAが異なり、副作用が多く出るようです。ただし、スプリセルの「胸水」や、タシグナの「血糖値上昇」など、薬によって特有の副作用が出る場合があるほかに、「湿疹」など個人差の大きい副作用もあります。しかし、副作用があるからといって、薬の服用をやめてしまうと、最悪の結果にもつながってしまうため、治療効果と副作用を比べて治療薬を選択していく必要があります。

次に、現在各地で進められているSTIM試験については、先行研究で被験者の40%近くが服薬を中止後も再発しなかったそうです。また、再発してしまった場合にも、それ以前と同じ薬でも治療効果があるそうです。こうした臨床試験の結果から、「血液がんに完治という概念はない」という現状にCMLが希望をもたらしめているようです。

また、治療中に挙児を希望されるケースについてもアドバイスをいただきました。グリベックを服用した状態で妊娠してしまった場合、17%の割合で子どもに障害が出たというデータがあるそうです。そこで、患者さんが妊娠を希望される場合は、服薬を一時的に中止しても安全そうなレベルまで治療が進んでから、医師のコントロール下で服薬を中止します。女性の場合は最低7か月、男性の場合はガイドラインでは6か月（臨床経験的には1か月）後に受精可能となるようです。ただし、男性でも精子の数が減るといったことはあるとのことです。

西田先生には、会場からの質問にもお答えいただき、「長期間治療を続けているがいつまで続けられるのか」といった質問には、STIMを受けてみることをすすめられていました。また、「就職活動の際に、病名を伝えるべきか」といったご相談もありました。年齢や性別にかかわらず、皆さん治療を続けながらも、自分らしく生きていこうとしているのだなと感じます。西田先生には、そうした患者さんたちの声に熱心に応えていただき、大変有意義な分科会となりました。

いずみの会 河田純一 記